
アーキタイプ・ストーリー ~Archetype Story~

伊耶那岐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーキタイプ・ストーリー ~Archetype Story~

【NZコード】

N10900

【作者名】

伊耶那岐

【あらすじ】

老賢者スサノオが深い瞑想から導き出したこの世の神祕を、永遠の少年スクナに向かつて解き明かす哲学的ノベル。

純粹無垢な少年は、その魂の純粹性故に、人生の苦難に遭遇し、迷いが生じる。

そうした時に、運命の老人は必ずや現れて、深い智慧と秘技をけん。

ヨーガ行者でもある著者が綴る心身と魂の世界觀をお楽しみください。

い。

神道瑜伽八十八世行者・伊耶那岐

これはフィクションであり、ファンタジーの世界です。現実世界を決して見失わぬようお読みください。

老賢者から永遠の少年への伝言

老賢者スサノオが深い瞑想から導き出したこの世の神秘を、永遠の少年スクナに向かつて解き明かす哲学的ノベル。

純粹無垢な少年は、その魂の純粹性故に、人生の苦難に遭遇し、迷いが生じる。

そうした時に、運命の老人は必ずや現れて、深い智慧と秘技をけん。ヨーガ行者でもある著者が綴る心身と魂の世界観をお楽しみください。

神道瑜伽八十八世行者・伊耶那岐

これはフィクションであり、ファンタジーの世界です。現実世界を決して見失わぬようお読みください。

存在の理由

スクナ「お師匠様、ボクはどこからきたの？世界はどうやってできたの？」

スサノオ「さあね、それは私にもわかんないな。だからこそ、宗教つるものがあるんだけどね」

スクナ「宗教？」

スサノオ「そうさ、宗教だよ。どれだけ科学が発達しても「人間もしくは生命がなぜ存在するか」というのは永遠の神秘なんだ。例えば全地球生命・人類が滅亡しても宇宙にとつては痛くもかゆくもないだろ？」

スクナ「うん」

スサノオ「だけど心情的には、生命とはかけがえのないものだろ？」

スクナ「そんな感じがする・・・」

スサノオ「人間には理性があつて理性が科学をつくったんだけど、感性つてのも存在するんだね。例えば誰かが死んだら悲しいだろ？」
スクナ「悲しいですよー。お師匠様が死んだら泣いてしまいますー。」

スサノオ「悲しんでくれるのかい、ありがとよ。けど悲しむことはないんだ、生命には終わりがあるけど、魂は永遠に不滅でまたスクナ、お前とも会うことができるからね。」

スクナ「ほんと？」

スサノオ「そつきくとさつきよりは悲しく感じなくなるだろ？」

スクナ「えー、お師匠様、嘘をついたんですかー、意地悪〜。」

スサノオ「嘘というか、方便というかだなあ、これは心理学の問題でもあるんだけどね。死後の世界、魂の永続性、輪廻転生というものを立ててそれを癒すんだ」

スクナ「ふむふむ」

スサノオ「人間ってのは悲しみに耐えるほど強い生き物じゃない

んだ、わかるかい？」スクナ「

スクナ「うんうん、そういうを乗り越えて生きていかなきゃいけないね！」

スサノオ「そうだね。けど人間は無目的ではなかなか生きれないんだ。」

スクナ「人間はどこからきて、どこに向かっていくの？どう生きたらしいの？教えてください、お師匠さま！」

スサノオ「この世は神がつくったんだよ、この世は魂を向上させる修行の場であり、最後は輪廻を抜けて神と合一するんだ」

スクナ「ほんと？？」

スサノオ「さあ、どうだろね？」

スクナ「また嘘をついたんですか？お師匠様、いじわる～。」

スサノオ「こんなことを考えて話していると無限に時間をとられて、生きることができなくなるだろ？だからまず、今やるべきことをしっかりやるんだね。今できる精一杯のことをするんだ。それが生きることだね。そしてそこで色々な経験をして、まずは生きることを実感し、そしてそれぞれの生命観を考えていけばいいこと。」

スクナ「はい！お師匠様！」

スサノオ「今の若者は自分探しをしようとしてるけど、自己というのには重層的なもので、社会と切り離して考えとはいいけないんだ」

スクナ「知らない土地に旅をしたりするとかのアレですか？重層的？」

スサノオ「まあ、現実社会だけの生活をするとエネルギーが消費するから、リフレッシュのために旅行とかするにはいいんだけどね」
スクナ「ボクも旅行は大好きです！今度、お師匠様、つれていくくださいよー！」

スサノオ「お前がちゃんと日常生活と社会生活をして、社会の人のために貢献していれば、『褒美につれていつてあげるよ』

スクナ「わーい！」

スサノオ「よく聞くんだスクナ。この世は人はなんで今、自分が存

在するかといふことも重要なことに蓋して生きているんだ。これは仕方のないことなんだけどね。ここが宗教の重要な役目で、宗教では神や仏を立てて一定の教義によつて解き明かしていく。けど、これも限界があるんだね。けど限界を感じつつもやはり何かを立てないと人間つてのは不安であり、やはり自分探しとかに走つてしまつんだけね」

スクナ「なるほど・・・」

スサノオ「このことはまた、どこかで話すとして、重層的というのは、スクナはお母さんから見たら子供だし、お兄さん・お姉さんから見たら弟だし、社会からみたらまだ学生だろ？だからスクナという人体に「スクナ」という名が張り付いており、そこに子供・兄弟・社会的地位などのペルソナが張り付いてくるんだね。そうやってスクナつてのは周囲からつくられるんだ、スクナつてのはその総称であり、すべてがお前なんだよ」

スクナ「名とか地位とか全てを取り去つて本当の自分が見えてくるんじゃないですか？」

スサノオ「どうなんだろう。たまねぎの皮を全部むくと、最後には何もなくなるだろ？」

スクナ「うん」

スサノオ「それと同じで、全部そういうのを取つてしまつても何も残らないんじゃないかな」

スクナ「魂とか靈とかが残るようつに感じるんですけど・・・」

スサノオ「そういうのが心靈主義、スピリチュアリズムっていう思想なんだよね。これは物質主義の反動でできたようなものなんだけど、これも極端な思想だね。もちろん魂や靈というものを認めてもいいと思うんだ。だけど、偏つてしまつのはよくないね。」

スクナ「中庸とか中道ですか！」

スサノオ「そうだね、そういうバランス感覚は大切だ。現代は身体を忘れてしまつていてるようつんだ。科学を発達させ身体的活動を物質に投影して機械文明をつくり、その反動で今度は靈魂のみの

世界ができ・・・もちろん、身体のみの偏りも駄目だね。」

スクナ「バランスなんですね！」

スサノオ「そうなんだ。それを踏まえた上で、私がお前にこれから形而上学的な世界との世のことについて悟つたことを教えていく。これは瞑想から導きだされた直感的思考であり、単なる哲学ではないんだね。頭だけの働きではなく、身体的技法と精神作用とを駆使した秘技なんだ。それらをこれから、スクナ、お前に開示していこう」

スクナ「よろしくお願ひします！」

輪廻転生の秘密（前書き）

ここに転生の秘密を解き明かそう・・・。

スサノオ「今日は輪廻転生について話そり」

スクナ「生まれ変わりのことですね！興味あります！」

スサノオ「スクナは生まれ変わりを信じるかい？」

スクナ「信じていますけど、信じているって言われるといつ」とはお師匠様は生まれ変わりを疑つておられるのですか？」

スサノオ「こういうものは人知では知ることができないものなんだ。だけど、ファンタジーとしてはあつてもいいね。」

スクナ「ファンタジーですか」

スサノオ「死という状態を人間はもつとも恐怖する。だから死後の世界や生まれ変わりを想定すれば、死というものは靈魂の変容でしかない、と思えてくるだろ？」

スクナ「なるほど、そこで終わりと思つてしまつと怖いけど、魂があつて、それが永遠に続くんだと思つと少しは怖くなくなるような気がします」

スサノオ「けど、ここには問題が発生するんだ。この世は一切が皆苦であり汚辱に塗れた世界とすると、逆にあの世つてのは極楽の浄土してのイメージが投影されてくるんだね。」

スクナ「極楽浄土！ そんな世界が存在するんですね！」

スサノオ「さあね、私もそうだけど、この世では誰も死んだ人がいなきからわからないね。けど、極楽浄土を想定すると喜び勇んでそこへ飛び込んでいくてしまう、これも危険なんだね。だからカルマという魂の情報を想定しておき、その情報操作をうまく行つ必要があるんだね」

スクナ「業つてやつですね！ スクナは悪いことしていませんから、必ず極楽浄土にいきますよ！」

スサノオ「それは良い心がけだね。現世でしっかりと精進していればきっと浄土にいけるとか、来世がよくなるとかしておこり。とま

あ、今までの話は前置きとして、本題に入ろう」

スクナ「お師匠様、前置き長いですね！」

スサノオ「歳をとると話が長くなるもんでね、今年で2483歳になるよ♪」

スクナ「凄いお歳ですね、けど姿形は若いままなんですね！」

スサノオ「神仙術と瑜伽行をしておればどうってことないね、歳つてのは。ただ、数えが多くなるのは嫌だな♪まあ、それは置いておいてだな。」

スクナ「はい！本題ですね！」

スサノオ「全ての生命の発展は、反復して加上されるんだね。」

スクナ「なんですか、それ？」

スサノオ「つまり、スクナの人生の半生は、前世の一生をやり直しているのさ。例えばスクナは音楽が好きで10歳からはじめるとする。次に踊りを踊ることを15歳とする。そうするとこれは、例えば、前世の一回目では一生をかけて歌を追求し、一回目の前世では音楽を追求したかもしれない。そして現世では25歳以降に踊ることを学び、35歳以降では前世で学んだ歌と音楽を現世で学んだ踊りと融合させて新たな分野を創造するかもしれない。これが「現世の半生」は、前世の一生を反復する」ということのさ」

人間50年の時代の半生を想定し25歳っこではしておぐ。

スクナ「ほんと？」

スサノオ「さあね、これは私の直観さ。先ほどのカルマの話じゃなければ、人生の苦難にあって、そこで自殺しても、また来世では同じような苦難に遭遇するんだね。苦難は成長の種であり、それを乗り越えて成長しなければならないんだ。とまあ、こんな話になつていくんだけど、これらの人生反復説はまったく根拠のないことでもないんだ」

スクナ「是非、その根拠を知りたいです！」

スサノオ「じゃあ、話そつか。全ての生命つてのは、それまでの生命進化を反復して発展するという法則があるんだ。これをヘッケル

ところの学者は「系統発生は個体発生を繰り返す」と述べている

スクナ「ああ、そういえば、人間もお母さんのお腹の中で魚みたいにヒラができたりとか動物の段階をやり直してるので聞いたことがあります！」

スサノオ「そうだね。そしてそれだけじゃなく、赤ちゃんは生まれてから立ち上がるまでに、魚の運動や四つ足動物の運動とかを繰り返しているんだね。」

スクナ「そう言われれば、腹這いなんかは、生命が海から陸にあがつていくような状態に見えますね」

スサノオ「そして、恐らく人生というのも同じで、ヒト科の成体は25歳とされるんだけど、25歳までは前世で経験してきた全てのことをやり直すんだ。まあ、成体となるのに個人差があるから、25歳前後と見るんだけど、それより後になつて経験することは、一つは新しい学び、もう一つは今まで学んだことを総合していくこと、ではないかと私は直観している」

スクナ「なるほど、それはありますかもしれません。じゃあ、25歳までに結婚したら、前世からの愛による結婚になつてなかなか口マンチックですね！」

スサノオ「もの凄く尻にしかれたりしてな！」

スクナ「えー、怖いよー！けど最近は晩婚化が進みましたか、以前は結婚は25歳くらいまでにするって観念がありますけど、25歳成体説とそれまでの因縁が強いと考えると、それも納得できるような気がします！」

スサノオ「晩婚化というのをどうみるかだね。それは新たな意識改革と見るのが、それとも前世からの氣づきが得れない時代になつてきたと考えるか」

スクナ「ふむふむ・・・」

スサノオ「話を少し戻そう。成体になる前に前世での学びを経験できない方も恐らくはいるだろね」

スクナ「もしかすると、それが自分探しをするという原因になると

「ということですか？」

スサノオ「そうかもしないね。まあ、それは置いておいて、とりあえず教育というものは、その子にとつてのきっかけづくりとしての学びの場とならないといけないんだ。つまり、この法則に従うなら、前世で体験してきたことをそのまますぐに反復していけるようなシステム、更にそれ以前に、自己に気づきを与えるようなシステムづくりが必要なんだ。」

スクナ「今の画一的教育や偏差値重視の教育じゃ、そんなのできませんよね」

スサノオ「ある程度の統一性と論理的思考や努力を計る指標として偏差値教育もいいと思うんだけど、人間に与えられたパラメータというのはそれだけじゃないんだね」

スクナ「パラメータですか？音楽力とか舞踊力とか？」

スサノオ「そんな具体的なものじゃないんだ。この根本的パラメータのことはまだどこかで後述しよう。」

スクナ「え？もう終わりなんですかー！じゃ、その時を楽しみにしています！」

寿命の秘密

スサノオ「『一日一生』って言葉を知っているかい？」

スクナ「はい！」

スサノオ「一日は貴い一生である、これを空費してはならない。という尊い教えたね。」

スクナ「そう思って生きる」とします！」

スサノオ「この一日つてのは『転生論からすると、『前世』の一生』なんだね」

スクナ「え、そなんですか？」

スサノオ「ヘッケルの反復説を拡大解釈した論理にあてはめるとこうなるんだ」

スクナ「なるほど〜。」

スサノオ「とすると、『眠る』ことというのは『死』と同等の意味になる」

スクナ「確かに死ぬことを永眠とかってはいいますもんね！」

スサノオ「この論理でいくと、長生きした方というのは転生をそれだけ多く繰り返したことになるね」

スクナ「はい、そうなると思います」

スサノオ「死というのは一つの魂の浄化なんだね。魂には煩悩という汚れがつきまとうから、これを死という状態で浄化するんだ。それとともに魂が学習したことは宇宙の図書館であるアカシックレコードという場所に保管されるんだ」

スクナ「ほんとですか？」

スサノオ「と、神秘家なんかは説明するんだろうけど、神秘家じゃないにしても、どうもこの世は一つの学びの場のような気がするんだね。」

スクナ「ボクもそういう気がします。そして、こうこう勉強は大好きです！学校の勉強は全然駄目ですけど」

スサノオ「老人になると精力が衰えるから煩惱もそれだけ減つていく。だからまず長く生きるということは魂の浄化につながるものいえるんだね」

スクナ「けど、お師匠様の言われることに従うのでしたら、人間の寿命は前世から決まっていることになりませんか？」

スサノオ「いいところに気がついたね。だから健康法をやろうと何をしようと、恐らく死ぬ時期つてのは決められているんじゃないかなと私なんかはみてるよ。」

スクナ「じゃあ、もし健康法をしているグループAとしていないグループBの平均寿命を調べた場合、平均寿命Bが長生きだとしたら？」

スサノオ「魂にはカルマという情報がつきまとっており、その健康法を現世で行うことはもう決定しているんだね」

スクナ「けど、この話を聞いてじゃあやーめたつてなつたら寿命つて変わるんですか？」

スサノオ「もしそうしたことをやめてしまふと、もしかしたら寿命は減つてしまふかもしないね。そうすると修行は前世よりも後退してしまうことになつてしまふ。この遅れを取り戻すのにはまた何回もの生まれ変わりをして修行し直さないといけなくなつてしまふ。だから、現世での精進というのはとても重要になるんだ」

スクナ「そりなんですか！それを聞いてやる気になつてきました！」

スサノオ「とでも言つておかないとみんなぐつたらしてしまうからね。」

スクナ「え？これも嘘なんですかね」

スサノオ「さあ、どうだろうね。こういうのは人智ではばかりしないことだから、その方の人生のプラスになるように考えていけばいいのさ。スクナ、お前が前向きに人生を進めるような考え方をしていけばいいんだよ」

スクナ「はい、わかりました！お師匠様！」

スクナ「お師匠様、質問！」

スサノオ「なんだい、スクナ、言つて」りん」

スクナ「前回では長寿と魂の浄化について教えていただきましたが、坂本龍馬とか吉田松陰とか高杉晋作とか若くして亡くなっていますが、そういう方々というのはじやあ、長寿の一般人よりも次元が低いことになるんですか？」

スサノオ「魂にステージをつけるってのは神秘家によくあることで、まあ確かに人格が優れているとか才能があるとか、個人差はあるね。魂自体は恐らく平等なんだけど、それを覆う煩惱によつて制約が出てくると私は考えている。だから才能というものを開花させるのは、何かを付け足すのではなく、今ある煩惱による制限を取り去つていいくことにあるとしているんだ。」

スサノオ「この煩惱というものはある段階になるとコントロールできるようになるんだね。煩惱とはマイナスのものとの「イメージ」が世間では強いけど、この宇宙には究極のことから、善も悪もないんだ。これは危険な思想につながつてしまふから、全てを開示することはできないんだけど、そうなつていて。そして煩惱もあるべくして存在しているんだね。」

スクナ「なんかお師匠様の言われていることは、世間の常識とは正反対な気がしますが・・・」

スサノオ「無理もないね。我々は固定観念の世界で生きているからね。それを外して、宇宙の根本から考えることをあまりしない。ここからの靈的啓示を受けて行動するにはどんな苦が伴うため、それなりの能力が必要なんだけど、その能力がない場合はやはり固定観念の世界に埋没して生きた方をさせられてしまうんだ」

スクナ「なんか、分るような分らないような・・・」

スサノオ「まあ、煩惱というものは、その根本は無明にあるんだけ

ど、単純ところでは食う・寝る・セックスするとかで、これがないと人間は肉体の維持が不可能になるから本能的なことなんだ。だから生命維持には必要だけど、これにとらわれる傾向があるんだ」

スクナ「だからコントロールをできないといけないんですね」

スサノオ「そうなんだ。で、話を戻すと、先ほどスクナの言つた若くして死した幕末の崇高な魂を持った若者たちなのだが、彼らはもう一定の境地に確かに達している。本来ならもう生まれ変わりのないステージに入っているんだけど、ある時代の苦難に遭遇した時に、わざわざこの世に煩惱の鎧を身に纏つて生まれ変わってきたんだね。そして彼らは時代を回天させるためには死をも恐れることはなかつた。そして役割が終わつたときに命を天に帰したんだね。仏教で言うとこの段階を『菩薩』と言つんだ」

スクナ「幕末の英雄は菩薩だつたんですね！」

スサノオ「さあ、どうだろうね。けど私にはそう感じてならないね、彼らの崇高な生き方は。」

スクナ「ボクもそう思います！」

スサノオ「前述とは矛盾するように感じるけど、寿命つてのはそういう意味では、それだけではその境地をはかれないと。菩薩の段階にはいつている存在にとっては、その人生で役割を果たしたかどうかが寿命になつてくるからね。けど、長寿することは凡夫のレベルでは清浄とも言つてもいい。煩惱が清浄化されて、そこから能力が開花し、この世で事を為す、そうした構造になつているんだね」

スクナ「心を清く正しくすれば、ボクも偉い人になれるんですね！」

スサノオ「偉い人になるためとか、出世するとかのために魂を清浄化するわけではないんだけどね、そもそもそれを望む事 자체が煩惱なんだ。まあお前が悪い道に入らないよりはいいんだけどね」

スクナ「そつか～」

スサノオ「それにただ魂の清浄化をすればいいってわけでもなく、それにはプロセスがあるんだ。それもまた話す事にするよ」

スクナ「はい、わかりました！お師匠様」

「」の才能

スクナ「お師匠様、質問！」

スサノオ「なんだい、スクナ、言つて『』らん」

スクナ「前回の話では、単純に長生きしたらよいつて訳でもないんですね。けど、野心剥き出しでギラギラして煩悩だらけの人物でも大きなことをする方つていますよね？そういうのはどうなんですか？」

スサノオ「実は才能と言つても2種類のプロセスが存在しているんだ。一つは煩悩を強化して自我を強くすることで発揮される才能、もう一つは煩悩を滅して魂から発せられる才能。この2種類があるんだね」

スクナ「煩悩を強くすると才能が発揮されるんですか？」

スサノオ「ある一面の才能は、とでもしておこうか、これは専門家に多いパターンなんだ」

スクナ「確かに、その分野で大家になると偉そうな人つてありますよね～。ああいうの嫌いだな～。一流になればなるほど人格も磨かれるはずですね～。」

スサノオ「これは文明の過渡期だから仕方のないことなんだね」

スクナ「まだまだ人類つて未成熟なんですね」

スサノオ「残念ながらそうなんだ。けどこれも人類には必要な段階ではあるんだね。」

スクナ「確かに優れた技術を持つていても使う方によつては、一方は人生を豊かにしますし、もう一方では戦争なんかに使われちゃいます」

スサノオ「そういうこともあるね。私の話つてのはもう少し言葉の整理をしないといけないんだけど、煩悩というのは心身両面で使っているんだ。そして自我つてのは主に精神面を意味している。この自我つてのは、デカルトが言つ『我れ』という観念と思つてくれて

いいね」

スクナ「『我、思う故に我あり』ですね！」

スサノオ「そのデカルトが『方法序説』というのを記し、そこで『分析』という考え方を発明したんだ。つまり明確なものと明確でないものを分けていき、明確なものだけを取り出していくと真理に近づくことができるという方法なんだ。結局はどれだけ分けても何も最後は存在しないかもしれないから、これは思想と言つてもよく、これは理性の思想なんだね。理性の役割というのは切断であり、物事を明確に分けていく、そして自他をも分けていく、ここで自我が確立されるんだ。だからデカルトの思想は自我の思想なんだね。」

スクナ「なんか聞いていて、デカルトという人はあまりよい人に聞こえないですね」

スサノオ「そうでもないんだ、やはり人類が発展するにはデカルト的な考えが出てこないといけない。古代というのは自他もそうだし、分野なんかも非常に未分化な状態だつたんだ。全てが混沌としており、これはこれで精密さが欠けて問題なんだね。呪術の中にも身体的効果のあるものや精神的効果のあるものが乱立しているんだけど、経験論的な効果なんかもあつて複雑に絡んでいるんだ」

スクナ「なるほど、それを分けていくことは発展プロセスとしては必要なんですね」

スサノオ「そうなんだ。しつかりと分野が分かれており、そして最終的にはそれらが有機的に統合されてくるのが理想的だね。デカルトの時代は分野というものが分かれた。物質の法則は物理学、心理的法則は心理学とかね。これを物心二元論とか言うんだけど、元々東洋思想の物心一如という観念と対立するんだ。東洋は東洋で分らないものは全て氣としてまとめたりして一元論を形成しているけど、やっぱりこれはこれで混沌としているんだね。ただし、東洋思想はそこに肉体的実践が伴っているんだ。だから思想自体は未分化のようにも思えて、そこに何らかの直感的な体感が記されている。西洋思想とは違う部分ではあるんだね。西洋の理性の思想と東洋の身体

的実践の思想が統合されて、人類は次のステージに入るだろうね」スクナ「しかし自我を強くするプロセスってのは本当に必要なんでしょうか？」

スサノオ「自我の確立は理性の発達とも関係しており、やはりこれは必要と見るべきなんだ。そして分野として切り離して、その分野をどこまでも追求する、しかしどこまでいっても見えてこないし、逆に壁にぶちあたるんだね。この体験が一定の諦観を生み、謙虚さを生み、他分野との融和に繋がっていくんだ」

スクナ「『実るほど、頭たれる稻穂かな』とか言いますもんね。本当にその道を極めた方というのは謙虚になるんだと思います」

スサノオ「そうだね。その段階を経ていらない謙虚さは単なる謙遜でしかなく、偽善でしかないね。日本人はこうした観念を美德とする部分があるけど、ここを抜けていかないと世界では通用しないね。」

スクナ「『もつと我を出す』ってサッカーの本田選手が言つてますけど、これですね？」

スサノオ「そうだね、確かに以心伝心という部分、空気を読むということに関しては日本人は優れているんだけど、言葉で自己表現するということに関しては弱いね。彼はその両方の能力を持ち合わせている。彼の活躍もそうなんだけど、こうした彼の人物像に注目が集まるということは、日本人の自我意識も次の段階に入るかもしない。」

あの世の法則

スクナ「お師匠様、質問！」

スサノオ「なんだい、スクナ、言ひて『」らん」

スクナ「死後の世界つてどんな感じなんですか？」

スサノオ「まずスクナは死後の世界があるといつ前提で話しているんだね」

スクナ「あれ？死後の世界つて存在しないんですか？」

スサノオ「それは人智ではあるともないとも断定できないね。けど万物には必ず陰陽の法則が貫いているから、『生の世界』を定義するに『死後の世界』を想定してもいいかもしないね」

スクナ「そうなんです、それを前提としてなんです！」

スサノオ「わかつたよ、そんなに知りたかったら話してあげよう」

スクナ「わーい！」

スサノオ「まず死後の世界、『この世』に対する『あの世』つてのは、先ほどの陰陽の法則で解釈すると、まったく正反対の世界なんだ」

スクナ「まったく想像がつきませんが、何がどう正反対なんですか？」

スサノオ「例えば重力解放されて、浮力だけの世界であつたり、この世とは逆さまになつて生活していたりするんだ。まあ、逆さまと言つてもこの世から見て逆さまに見えるだけで、あちらの世界ではそれが普通だから、こちらの世界が逆さまだともあの世から見たら言えるんだけどね」

スクナ「逆さまなんですか？信じられません！」

スサノオ「赤ちゃんつて逆子は別として逆さまに生まれてくるだろ

? 赤ん坊という存在はあの世と最も近い存在なんだね。この世で見えるあの世的な存在はそつ確認できるんだ。これはそんな風に考える民族だっているね」

スクナ「ふむふむー。」

スサノオ「赤ちゃんって世界が逆さまに見えてるのは知ってるかい？」

スクナ「え？ そうなんですか？」

スサノオ「赤ちゃんはこの世を逆さまに見てるんだ。これはあの世にいる名残なんだね。それに慣れるまでしばらくかかるんだ。つまり、赤ちゃんは生まれたときってのは、魂はまだあの世的なんだけど、この世に魂を適応させるのに時間が少しかかるんだね」

スクナ「そうだつたんですか！」

スサノオ「さあ、どうだろね。実はこれにはちゃんと理由がって、我々もそうなんだけど、実は見る対象を水晶体を通してみると網膜には逆さまに映るという物理的理由が存在するんだ。それを脳が調整しているんだね。」

スクナ「じゃあ、その事は、あの世は逆さまだつて理由にならないんじゃないですか？」

スサノオ「そうでもない、科学というのはこの世の物質レベルを基準にした法則であつて、あの世の靈魂レベルの法則からすると違うんだね。つまり物質レベルでは脳というものが認識を調整していると思われがちなんだけど、認識を調整するのは靈魂レベルではブツディ（覚）という意識なんだ。」

スクナ「ふむふむー。確かに、脳に心があるつてのが今の時代の常識ですけど、そうでもない気がしますしねー。」

スサノオ「心の存在場所の話もまたどこかでしよう。あの世ではレンズを通さなくともいいから、ブツディは逆さまにする必要性がないんだね。だから逆さまなのは実はこの世なんだ」

スクナ「えええええ！ そだつたのですか！」

スサノオ「つて、気がするね」

スクナ「驚かせないでくださいよー。」

スサノオ「けど、その可能性は捨てきれないんだ。魂つてのはこれも受けるエネルギーが違うんだね。」

スクナ「エネルギー？」

スサノオ「そうなんだ。エネルギーには4種類あると科学では言わ
れているだけ、その一つに重力がある。これは空間の歪みでしか
ない説とかグラビトンという物質が存在するとか、色々と考え方は
あるんだけど、とりあえずそういうのは置いておいて、魂が受ける
のは重力全く正反対の力なんだ。」

スクナ「重力の反対というと浮力？」

スサノオ「そうだね。重力に対する斥力を受けて魂は上昇していく
んだけど、あの世ではこの斥力が重力的な意味合いをもつてくるん
だ。つまり重力つてのが魂をこの世にどどめておく力、反重力はこ
の世から魂を離す力、逆に言うと重力はあの世から切り離す力、反
重力はあの世に魂をどどめておく力と言えるんだ。つまり全ての法
則性を見る場合、この世とあの世の法則を総合しないと全ての法則
性というのは見えてこないんだね」

スクナ「この世の見方に偏つてもいけないし、あの世の見方に偏つ
てもいけないんですね！」

スサノオ「そうなんだ。科学者はこの世の法則を真理としているし、
神秘家はあの世のことを本質としている。だから対立が生まれるん
だね。これから学問はそうした見える世界と見えない世界、色の
世界と空の世界、形而下の世界と形而上の世界とを総合していく必
要があるね」

スクナ「それをお師匠様はやられているわけなんですね！すごいな
！」

スサノオ「私の命ある限りやうつとは思うのだが、こうこうものは
一代ではなかなかできないんだね。だからできる限り、私が悟った
ことをスクナ、お前に伝えていくからよく聞くんだよ」

スクナ「はい、お師匠様！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090o/>

アーキタイプ・ストーリー ~Archetype Story~

2010年10月9日12時26分発行